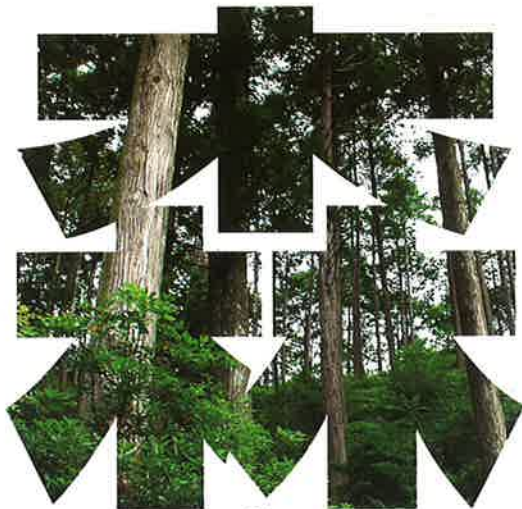




「三重の木」で
家を建てた人たち



と結ぶ

実例集
Vol.5



づくり

我が国の木材自給率は約二割

我が国は、国土の三分の二が森林で覆われた「緑の列島」。森の国フィンランドやスウェーデンと並ぶ世界有数の森林国です（世界の平均森林率は約30%）。

恵まれた森林資源を利用して、われわれの祖先は家を建て、家具や食器をつくらせて暮らし、木の文化を育ててきました。山を管理する人や炭焼き、大工、木地師など、多くの人々が木との関わりを生業としてきたのです。その豊かだった森林が、かつてない危機に瀕しています。

我が国の森林の四割を占める人工林は、主に木材の生産を目的に植えられたもので、適切な保育・管理が必要ですが、それをせずに放置された森林が増えているのです。

なぜ、そうなったのか。それは木材価格の低迷により、植林から伐採までの長期にわたる投資に見合った利益を得ることが困難になったから。最も需要の大きい建築分野で、コンクリートや新建材、輸入木材に主役の座を奪われ、今や木材の自給率は二割程度に減ってしまったのです。

緑の循環を未来へつなげよう

地域の森林を守り、健全な姿で次世代へ引き継ぐために、われわれができるのは、近くの山の木で家を建てること。

自給率40%といわれる食の分野では、近ごろ「地産地消」という言葉がよく聞かれますが、地域材で家を建てることは、まさしく木材の「地産地消」です。

物流が発達する以前、近くでとれたものを当たり前のように食べていたように、家づくりも昔に戻しましょう。そうすれば、森林環境が維持されるだけでなく、山村や中山間地に雇用が生まれ、麓では製材業や建設業などの産業が活気づきます。

森林資源の良さは、石油などの地下資源と違って将来にわたり再生産が可能なこと。伐採して利用し、跡地に植林すること。この緑の循環を未来へつなげていくことは、現代に生きるわれわれの使命です。

昨今の日本の住宅寿命は、約三十年といわれ、これは欧米の三分の一の短さ。山で百年かけて育った木は、建材になってもせめて百年は保たせたいものです。

Think about Forestry

森と結ぶ家づくり

家を建てる時、少し考えてみてください。
あなたのまわりの森林のことを。



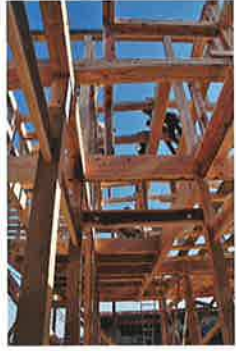
植林されたヒノキ苗。



枝打ちで林内に光を入れる。



伐採予定樹齢に達した大木。



「三重の木」で建設される住宅。

環境にも深刻な影響が

主要な建築材料であるスギやヒノキは、苗木を植えてから伐採までに五十年ほどかかります。その間、草刈りや除伐、枝打ち、間伐など、人手をかけなくてはなりません。それを怠った窮屈な森林では、木の間隔が混み合ってお互いに成長ができません。地表まで光が届かないので下草が生えず、大雨のたびに表土を流出させてしまいます。のびのびと枝葉を広げ、幹を太らせ、どっしりと大地に根を張ることができないひ弱なモヤシ林は、暴風雨に耐えきれず、しばしば土壌崩落さえ引き起こします。

こうなると、将来に優良な木材が得られないばかりか、光合成や水源のかん養といった、森林本来の機能は発揮されず、環境にも深刻なダメージを与えかねません。

水道から出るおいしい水も、健康な森の恵みなのです。価格が安ければいいと、土に還らない新建材を安易に選んだり、海外から大量の輸送エネルギーを消費して木材を輸入することは、地球温暖化にも荷担することを知っておくべきでしょう。

木は呼吸する自然素材

木は伐られ、製材されて、住宅の一部となつてからも呼吸をしています。空気中の湿度が高いときには水分を吸収し、湿度が低いときには放出する性質があり、このような木材の持つ調湿作用は、快適な居住環境を作り出してくれます。

また、木材は多孔質な素材で、熱を伝えにくい空気を内部に多く含んでいるので、木の家は冬暖かく夏は涼しいのです。無垢材のフロアなら、汗ばむ季節でも素足で快適に過ごすことができます。

木や土壁、イグサ（畳）など、呼吸する自然素材は、常に室内を快適に保ち、有害物質を放出することはありません。

木には音や光を直接反射せず、一度受け止めてからやわらかく反射するので、目や耳が疲れないという性質もあります。ヒノキなどの芳香は、森林浴で知られるように人をリラックスさせてくれるので、木の空間にいると落ち着くのです。

健康的かつ、年月を経て味わいを深める木と、暮らしてみませんか。



1

朝日町 Wさん邸の場合

美杉の葉枯らし材を構造・内装に 135度で開口し、光と風を集める家

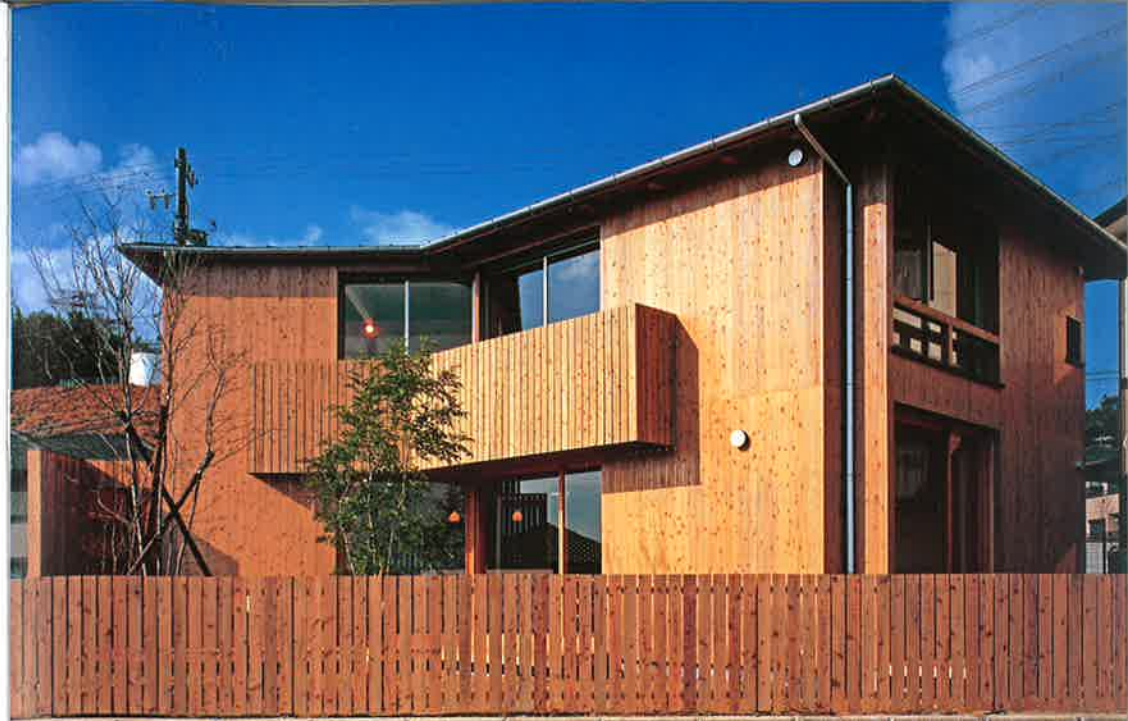
設計 / I 設計室、 納材 / 中勢森林組合、三浦林商、 施工 / (有)大幸建築

「仕事柄コンクリートの建物ばかり造っているので、住まいは温かみのある木造にしたかった」
 大手ゼネコンに勤めるWさんが生まれ育ったのは、古い町並みが残る閑宿。当初から、地元材で、地元の建築家と工務店で建て、少しでも地域に貢献したいとの意向だったという。

「三重の木で家をつくる会」の手で完成した家は、百三十五度で南東に開口する二階屋。全面スギ板張りの端正な外観が、静かに存在感を主張する。内部は、床と天井が木で、壁は白漆喰仕上げ。土台と大引にヒノキを使う以外は、構造・内装ともに美杉の葉枯らしスギが用いられている。葉枯らし材とは、伐採した丸太を数ヵ月間出で自然乾燥させたもの。人工乾燥より手間も時間もかかるが、色艶がきれいで暴れにくく、重量が減るので輸送コストは抑えられる。

地球に優しいスローな木材といえる。

リビング・ダイニングと、玄関、浴室とは、それぞれ引き戸で仕切られるものの、部屋を孤立させる隔壁は設けられていない。二階は畳敷きの寝室と板張りのホールのみ。かつての田の字型に倣ったのびやかなスペースは、自在に風が駆けめぐり、常に家族の一体感が感じられる。木や壁土が湿度を調整してくれるので、夏は涼しく、冬場は結露知らずという。



外壁、ベランダ、塙ともにスギの縦張りで統一。すっきりしたイメージの外観。



135度で南東に開口するリビング・ダイニング。大型のガラス戸は、納戸、雨戸とともに戸袋へ収納できる。



右 / ガラス天井で明るいエントランス。壁にはベンチが設けてあり、靴を履いたり、荷物を置いたりするのに便利。

中 / 仕切り家具が入る前の2階。フレキシブルな田の字型の空間構成がよくわかる。

左 / リビングの戸を収納すると、ウッドデッキや中庭と一体となった開放的な空間が生まれる。土壁塗りには、施主夫妻と幼い姉妹も参加した。

● I 設計室 TEL.059・351・8301 (三重の木で家をつくる会事務局)

<http://www4.cty-net.ne.jp/i-sekkei>

● 建築坪単価 約70万円 (外構、設計・監理除く)



2

四日市市 Nさん邸の場合

尾鷲ヒノキ、漆喰壁、日本瓦… いつかは土に還る家

設計・施工／(有)明日検、 納材／速水林業ほか

瓦の灰色、漆喰の白、無垢の木肌……。古来の淡い色彩で構成されたNさんの住まいは、玄間に入るとつややかな朱色の大津壁に出迎えられる。

「玄間はその家の顔。左官の親方渾身の作です」子どもが生まれ、アパートでは手狭になってきた夫妻はハウスメーカーの展示場を見て回るうち、心休まる木の家に住みたいと実感する。そんな折、知人宅の完成見学会で、和の伝統工法で今様の家をつくる工務店の代表と出会う。

和の伝統工法——それは地震に耐えうる力を最大限に活かすべく、柱が重要な役割を果たす造りである。要となる柱には、FSC認証の森から伐り出された尾鷲ヒノキが使われた。

断熱性能は厚い土壁と本瓦が担い、無垢の木を保護するため、スギ板張りの床にはドイツの自然塗料が塗られている。まさに「いずれ土に還る家」だ。かつての日本の住宅は、それが当たり前だったが、戦後は石油由来の新建材が主流になってしまった。しかし、そうした家は壊すことになった場合の費用が割高となっている。

目先の便利さ・安さより、将来を見据えた家づくりを……。力強い骨格のNさん宅を拝見していると、強くそう考えさせられる。



左官仕事の塗り壁が迎える玄間。リビングと同じスギの床がのびており、足当たりがやさしい。



右／1・2階とも腰下にスギ板を張り、上部は土佐漆喰で仕上げた端正な外観。無垢の木を保護するため、スギ板には柿渋が塗られている。

中／柱も床も、階段の踊り場も手すりもすべて木なので、見た目がやわらかい。

左／将来、梁の部分で仕切れることも可能な子ども部屋。家族構成にあわせて間取りの自由度が高いのは、木の家ならではの。

●(有)明日検 TEL.059・321・0933 <http://www.asu-naro.jp>

●建築坪単価 約60万円

3

津市 Yさん邸の場合

木立に囲まれた シニア夫婦のワンルーム

設計 / suga建築設計、 企画 / 藍住空間プランニング
納材 / (有) 梅田林業、 施工 / (株) ウメダハウジング

かねてから、定年を過ぎたら自然豊かなところで暮らしたいと考えていたYさん夫妻は、緑あつて津の郊外地を手に入れ、三重の木でOMソーラーハウスを建築した。

傾斜地の段差を活かした設計で、ガレージを兼ねた頑丈な基礎に乗る上屋は、宮川流域のスギやヒノキを、構造から内外装まで用いている。外壁の保護塗料は、榊原温泉に宿をとったりしながら、夫妻自らが塗った。

「周囲の環境と調和するデザインを心がけました。外周にデッキを配し、内部は隔壁を設けないワンルームに。山側の和室と寝室は、リビングダイニングより八十五センチ上がったスキップフロアとしています」

使い勝手がよく、太陽熱や薪ストーブで効率よく全館暖房できる。平地より数メートル高く、木立に囲まれ涼しいのでエアコンレスだ。寝室の上部にはロフトが設けられ、平屋ながら三段階の床を持つ。トイレや洗面、キッチンや浴室は、ユニットでなく全て手づくりだ。

建築家が意図したのは、積極的にアウトドアを楽しんでもらうライフスタイル。四季折々の表情を楽しめる玄関前のベンチや、玄関ホールテーブル、ウッドデッキなど、さまざまな場所が気分次第で書斎になり、カフェとなる。



日常を過ごす住まいというより、別荘かペンションのようだったらしい。



建築地の段差を活かし、山側の和室はリビングから85センチ持ち上げられている。



右 / ヒバ材を張った浴室は、窓を全開にすれば露天風呂気分。
中 / 玄関ポーチはウッドデッキ仕様。手摺りを兼ねたベンチは、濡れ縁風に見える。
左 / 自然志向のYさん夫妻。テーブルは、建築地に生えていたヒノキで主人が自作した。ストーブの薪は、敷地内の雑木で自給できているという。

● suga建築設計 TEL&FAX.059・279・3364
● 建築坪単価 非公開

4

志摩市 Mさん邸の場合

杉、FSC桧、珨ガラ…地球にやさしい 施主参加型パッシブソーラーハウス

設計／森下雅子+浜佐一級建築士事務所

納材／東紀州・尾鷲ひのきの会ほか、 施工／(有)浜佐建設

「コンセプトは、少ないエネルギーで快適に暮らすパッシブソーラーハウス。エアコンはつけずに、夏は深い庇で陽光をさえぎって涼しく、冬は高窓や南面の窓から温熱を室内にとりこんで暖かく。日本の古民家に通じる部分があるんです」

夫の定年を前に、終の棲家にふさわしい土地を探し回り、磯部の山林を購入したMさん夫妻。設計は、一級建築士である夫人と地元工務店がタッグを組み、地域の材料や人的ネットワークによる家づくりを行った。

こげ茶の外壁は、施主と友人、工務店の若手が参加してスギ板をバーナーで焼いたもの。二階の白い漆喰壁と鮮やかなコントラストを見せている。室内に入ると、南面のダイニングキッチン上部が吹き抜けとなっていて、開放感バツグン。

梁は、県産のスギとヒノキ。柱はFSC認証の尾鷲ヒノキで、施主が森を見学に行ったときから使用を決めていた。下地材はスギのフォレストボードで、断熱には化学繊維の代わりにモミガラが詰められている。どれも家としての役割を終えたあかつきには、土に還る素材ゆえに選ばれた。

緩勾配の屋根は、土をのせて屋上緑化の予定も。自然を拒むことなく、その恩恵をうまく活かそうという古今の知恵がこの家には結集されている。



南面を大開口とし、太陽光を集めるダイニングキッチン。吹き抜けの大津壁と、太いスギの梁が美しい。



右／断熱材にモミガラを使用した壁には、内部が覗ける小窓が。

中／施主自らが焼いたスギ板を横張りにした外観。ウッドデッキや、ブドウを這わせる予定のパーゴラなど、木の意匠がふんだんに見受けられ、周囲の風景と馴染んでいる。

左／湿気に強いヒバとコルクタイルを張った浴室。クスの巨木を眺めながら、露天風呂気分が味わえる。

●(有)浜佐建設 TEL.0599・72・5570 <http://www.hamasa.jp>

●建築坪単価 約60万円(標準的な仕様で)



大台町 Nさん邸の場合

土台はヒノキ、梁はスギ、子供部屋はサクラを床に…適材適所の平屋造り

設計/Σ建築設計事務所、納材/松下製材(有)、施工/前川建築

「以前住んでいた家が一階が駐車場で、二・三階が住居スペースだったんです。歳をとったら階段の上り下りがキツイだろうと感じて」

元建具師のNさんは、働き盛りのうちに思い通りの住まいをと、ベテラン設計士とプランを練った。動機がそれゆえ、広い敷地を有効に活かした贅沢な平屋である。

白壁に瓦を葺いた住まいは、御影石を張った玄関で靴をぬぎ、リビングへ。空間のほぼ中央に薪ストーブが座る床は、すべてウッドイナ板張り。壁はクロスと木を組み合わせ、色調が一辺倒にならないよう工夫されている。

ふすまを開け放つと十二帖になる和室には、施主作の雪見障子や、欄間、凝った床の間が。各室をつなぐ廊下には、堅牢なカリン材を。一人娘の部屋だけは女の子らしい色調にと、サクラ材が床に用いられている。

土台はヒノキ。柱はヒノキとスギを適材適所に使い分けている。力強い梁は、昔から銘木とされる伊勢のスギだ。

「長く快適に暮らせるよう心配りは十二分にしたつもりですが、万一、不都合が生じても木の家ならリフォームもたやすいですから」

暮らしよい家ができて、外出が減ったそうだ。



床がひとつづきとなったキッチン側からリビングを望む。トップライトから陽光がさしこみ、明るい印象。



右/玄関は石と木がバランス良く配されている。
左上/施主の自作である雪見障子がはまる和室。親戚や友人が来た際の宿泊室として設けられた。
左下/グレーの建物に温かいイメージを添えたいと、木の塀は施主がデザインして積み上げた。

●Σ(シグマ)建築設計事務所 TEL.0598・76・7800

●建築坪単価 約75万円





6

紀北町 Yさん邸の場合

七本の五寸角通し柱が支える 頑健であたたかな宮川スギの家

設計/宮原良雄建築設計事務所、納材/宮川森林組合、施工/東和建設

「二人ともアレルギーに敏感な方なので、建てるなら健康的な木の家と決めていました」

陽当たりのいい南斜面に建つYさん夫妻の家は、宮川流域のスギ、ヒノキがふんだんに使われ、見た目も香りもすがすがしい。

設計を担ったのは、地域材による家づくりに積極的な地元の建築家。耐震性を考え、五寸角のヒノキ通し柱七本をはじめ、管柱も通常より多目に使われているので、建前の時は「なんて木の多い家だろう」と感じたという。

柱や梁を現しとする内装は、腰下がスギで、腰上は明るい珪藻土仕上げ。入居前に二人で蜜ろうワックスを塗った。床は、スギ板を熱処理したウッドピアの圧密材張り。手入れが楽で、年輪の凸凹が素足に心地いい。天井裏には間伐スギを利用した「幅はぎ材」が用いられている。

キッチンカウンターや手洗い、書斎の棚や食器棚、引き戸などの建具類もスギ材で手づくりされており、一体感が落ち着きを感じさせる。

外装は、セルフメンテナンスできる一階部分がスギの南京張りで、二階は鋼板張り。

木と土壁が熱を蓄え、調湿してくれるので、一階でストーブを焚いていると二階の寝室までほの暖かく、加湿器無しで過ごせるという。



上/外装は、施工自身でメンテナンスできる1階部分のみスギ板、2階にはガルバリウム鋼板を張っている。

左上/畳敷きの小上がりとつながるリビング・ダイニング。

左下/ロフトを備える寝室は、書斎やウォークイン・クローゼットとひとつづきになっており、使い勝手がいい。

●宮原良雄建築設計事務所 TEL.05974・7・2967

E-mail : yoshio.miyahara@ivory.plala.or.jp

●建築坪単価 約60万円



軸組の構造がよくわかる2階ホール。2枚のドアは将来の子ども部屋用で、内部は仕切られていない。

木のつく漢字

木が日本人にとってかけがえのないものであることは、漢字を見るとよくわかります。

月・火・水・木・金・土・日。曜日を表す漢字は、どれも暮らしに欠かせないものばかり。太陽や雨土と同じく大切に扱われてきた木の文化を、われわれの時代で絶やすことなく、未来へ伝えたいものです。

日本の住宅が木を基本としているのは、棟、梁、柱、桁、根太、床、束と、漢字を当てはめると一目瞭然。現場の一番えらい人は「棟梁」と称されます。

はしら
柱

ほん
本

木の根の一番太い部分のことで、本物、本心、本質、本性、本命…ものごとの中心やはじまりを意味します。

やすむ
休

人が木に寄りかかって休息しているところ。つまり、人は木のそばが一番安らぐということ。仕事の疲れをいやす家は、何で建てたらいいか、わかりますよね。

ね
根

何ごとも枝葉より、基本は根っこ。根源にあるのは何か、根性を入れて根幹から見直したいものです。

まくら
枕

机、椅子、棚、椀、櫛、桶…。家の中を見回せば、木への道具が一杯。現在ではファンリが当たり前の枕も、もとは木できていました。

ざい
材

才は十の字を斜めに切り取るさま。立木が伐採されると材木になります。建材のほか、人材、教材、逸材、題材、材料など、もとなるものとの意味があります。

さかえる
栄

木の枝いっぱい花が咲いている様子。林業家にとって、森の木がすくすく育つことは、そのまま繁栄の象徴であったことでしょう。

こう
校

物事を教え習うところ。かつて、ほとんどの学舎は木造でしたが、戦後は鉄筋コンクリートが主流に。木造校舎が復活すれば、床や腰板の雑巾がけが、物を大切にすることを養うでしょう。

「三重の木」利用推進協議会

三重県津市桜橋1丁目104
TEL.059-228-4715 FAX.059-226-0679
<http://www.mienoki.net>

三重県産木材を使う
住まいのご相談は